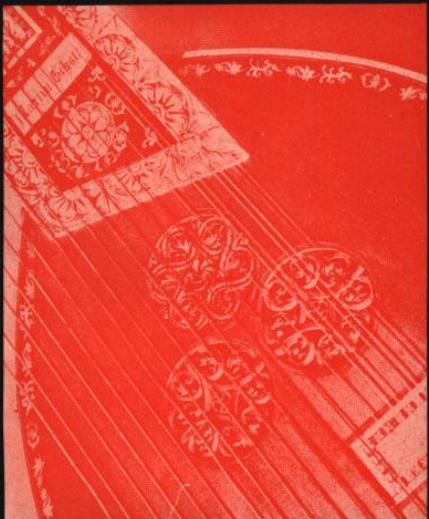


# ギター日本

Vol. 1 No. 3



**Martin Schott Chittarone (表紙写真解説)**

マルチン・ショットによって作られたチタローネ（チタローネはリュートよりギターに移行する中間的存在と考えられているが主としてドイツ・オーストリーで16世紀後期より17世紀にかけて流行した楽器である）の三つの繊細なバラ飾りは非常に素晴らしいものである。下の1対は四葉を付けたバラの花のデザインで、上の1つは二つのデザインが組合せて三つ葉をなしている。

製作者マルチン・ショットは1615～1682年に生存し、これは1680年につくられた。プラーグの国立博物館にあり、彼はプラーグに住み、ドイツのリュート製作家であり、広く彼の素晴らしい楽器によって知られている。又彼は演奏者であり、作曲家でもあった。この楽器は1、2、3弦は復弦で全10弦に調律・番外弦（開放弦）は単弦で7弦ある。この楽器の全姿は本号13頁にのっている。

**右頁の貝の写真解説**

天の川を見乍ら中世の巡礼者達はヨーロッパ各地から、スペインのガリシアにあるサンティアゴ・デ・コムポステーラ（北スペインの古都で現今毎夏セゴビアの講習会が開かれる所として有名・古風な静かな落書きのある町である。）へお参りした。

ガリシア海岸でとれるウイエイラという貝を、巡礼の記念に衣に縫っては帰った。

このウイエイラで途中泉の水を飲んだ。

（創刊号 岡田 城先生の文より）

その貝をここに御紹介する。貝は岡田先生より私が頂戴したもので原寸のままである。（解説・永田哲夫）

**ギター日本**

第一巻 第三号 (Vol. 1 No. 3)

1966. 10月

季刊 3・6・9・12月発行

(編集の都合により変更する場合があります)

---

発行所 ギター日本社  
東京都新宿区南元町13  
TEL 東京(03) 353-9525・351-6992

編集長 永田哲夫  
編集室 宇都宮敬三  
川口洋子  
涉外 佐藤志智子

誌価 1年分(4回) …… ¥ 1,200 (送料共)  
半年分(2回) …… ¥ 650 (送料共)  
1回分 …… ¥ 300 (¥50)  
バックナンバー …… ¥ 300 (¥50)

**目次**

表紙 マルチン・ショット作のリュート 永田哲夫

▶ ショット作のリュートについて 永田哲夫

▶ 詩 永田哲夫

▶ スペインに於けるギターの歴史(完) ピダール・ベニタ・レペルタ著 (スペインの話題より)

▶ ギターによる初步和声学の実習 嘉藤俊介

▶ リュートの歩んだ道 幕田慶司

参考楽譜 女王のマスク(16世紀の作品)

▶ 1967年フランス放送局主催国際ギターコンクール応募規定 水田哲夫

▶添付楽譜解説 水田哲夫

▶添付楽譜 ガスパール・サンス作曲 (国際ギターコンクール課題曲) エミリオ・ブジョール編

▶ギターについてのアンケート 永田哲夫企画

阿部保夫 阿部俊夫 新井市太郎 岩沢良一

池田俊勝 石月一匡 奥田絆正 小原さき

大橋 浩 神谷典孝 亀山寿天子 京本輔矩

近藤敏明 小船照子 後藤昌治 佐藤志智子

寿楽光雄 谷口吉弘 檜上宣順 浜田三彦

原 正 古川昇 中林淳真 松田二朗

幕田慶司 松本憲一 村田穂 高木孝の諸先生

▶カボタスト欄 永田哲夫

表紙写真…ギターレビュー誌より 題字…横尾幸弘

カット画…佐藤恒二 写譜…永田哲夫



## スペインに於けるギターの歴史（第二回）

ビダール・ベニト・レペルタ著  
(スペインの話題より)

編集 永田哲夫

ク王の後継である若死にした don Juan の両親は彼に良い音楽教育を与えるよう留意し、事実彼は、vihuela やその他の弦楽器の名手であったようだ。1493年頃のローマには“非常な技巧と甘美さでもって弦楽器を弾ずる数人のスペインの樂士専門家”がいた。

15世紀の終りには vihuela (いわゆる vihuela de mano) は平たい底と垂直の曲面を持ち、12の弦が同一の音に調整された6列に別かたれており10のさんを持っていた) は、その時代の音楽界を牛耳り、それまで何世紀もの間共存して来た他の楽器を、はるか背後に追いやるか、そうでなければ絶滅させる程であった。Laud の場合がそうであった (当時 Laúd はヨーロッパ全土に拡がっていたが、スペインに於ては“その表現の方法に於て Laúd に劣らないばかりか、比較的簡単に3つ又は4つの音色で弾くことができる点から、Laúd を凌駕する” vihuela が普及していた。又モーロのギター (guitarra morica) の場合も同様であった。Laúd とモーロのギターは共に曲面の底を持ち、それぞれ3列および4列の弦がついていた。ラテンのギターは前に述べた通り一般庶民が手にしていた。[この時迄、ラテンのギターは楽器の形態の発展に重要な役を演じていた。事実“ギターは vihuela から最高音弦と第7弦を取り除いたものに他ならない”と Bermudo はその著書 Declaración de instrumento の中に述べている一すなわち四弦の vihuela であり、これが一つ又は二つの弦を捨て、その大きさは別として、いわゆる vihuela となるのである。

ラテンのギターは“二つの方法で扱われた；Rasgueada (一度に全部の弦をはじく) か Punteada (一本又は數本の弦だけを爪びく) かである。一般の人は運指上簡単なボジションの単純な和音を出すため Rasgueada (はじく) ことが多かった、と Bermudo は述べている。すなわちス

ペインに於てもイタリアに於ても同じ方法で Guitarrilla (四弦の小さいギター) を弾き、弾き手の技術又は良い趣味が、それと命ぜる場合これを爪びいていた。(E. Pujol) Góngora は病の後で次の様に歌う。

私は部屋の中で  
Guitarrilla をつかむ  
理髪屋がなぜつけるように  
蚕人がつかみかかるように

16世紀の初期大きい vihuela の隆盛と共に高い芸術的資質を持った作曲者達の世代が、魅惑的に現れ、彼等は当然自分達のために、熟練した演奏家を要求した。“vihuela を彈くものたちが隆盛したことは16世紀に於て、スペインが誇ってよい光栄の一歩である”と Higinio Anglés は言っている。彼等は外国の Laúd 奏者達と共に、16世紀の末から17世紀にかけて、フイレンツェ人達が再興したとされる独唱曲の伴奏への道を聞いた功績がある。しかしそれ以外にもスペインの vihuela 奏者達は変奏曲芸術を大規模に開始した最初の者達でもある。偶然にも、この分野ではオルガン奏者達が先駆者であった。

しかし、“1535年より1576年にかけて作曲された vihuela のための曲により有名になった vihuela 奏者達の流行に統いて、—Juan Carlos Amat の論文〔スペインとパンダルの二つの型のギター；カステティリヤとカタラン (1572年)〕によれば—再びギターの流行がやって来る。

16世紀の最後の3分の1年にかけて vihuela は退場し始める。一方 Vicente Espinel によって5弦にされたギターが〔5弦のギターはこの有名な詩人・音楽家である Espinel によって発明されたのではなくて、彼によつて採用されたのである。それより以前既に Juan Bermudo が我々にその著書 Declaración de instrumentos (1555年に出版された。Espinel は1549年に誕生) で指摘するように4弦のギターと同時代に5弦のものも使われるようになった。又 Bermudo は彼が作曲した曲について—“この曲は最高音の弦の他にもう一本の弦(第4弦の上の第5弦)を加えることによって演奏することができる”と書き加えている。又“新しい形の音楽の演奏に加えるために兄弟楽器 vihuela の伝統を一部とり上げた方がよい”と言っている。それ(5弦)は Guitarra española と呼ばれ始め、開化されたヨーロッパ全土に直ちに広まった。〔パリの Jacquemart-Andre 博物館には首から共鳴箱の下の縁迄が110センチ、共鳴箱の胸に当る部分及び腰に当る部分がそれぞれ29センチと30センチ、蓋と底を結びついている輪状の部分の巾が7センチである楽器が一つ保存されている。この大きさでは低い音域を出すと思われる〕(E. Pujol)。“この時代こそと Sainz de la maza は言っているが—セラバンテスがその Galatea の中で Vicente Espinel を称賛した時代であり、この時、高級な音楽と一般的な音楽の流れが、ギターに於いて合流し、完成されて、その未来



Vicente  
Espinol  
(ビセント  
エスピネル)

を決めるのである”

前に述べたように、すでに5弦のギターは vihuela にとって代わり Carlos Amat を経てアラゴンに生まれ、1674年に “Instrucción de música sobre la guitarra española (スペインギターについての指導書)” を出版し、スペイン全土に普及していたこの楽器を神聖化する僧 Gaspar Sanz に至る。

17世紀と18世紀の間、ギターは民衆的であると同時に高貴の人々のものであり、あらゆる場所で長い年月、親しみ庇護されて生きて来た。そして、イタリア音楽がスペイン音楽界に於いて除外に我物顔をするようになると “Domenico Scarlatti [ナポリ派に属する、イタリアの有名な作曲家] が当時広めていたピアノ・フォルテ [18世紀の末に現れた最初のピアノ] を前にして、ギターは、サロンに於て、その地位を失ったごとくであった。しかしそれは小歌劇のもととなつたあの頃の歌劇 (Tonadilla escénica) のオーケストラに組み入れられるという大成功をなしとげてからのことである [Tonadilla escénica とは、器楽の伴奏を伴った、スペインの短かい喜歌劇のことであり、民衆劇に組み入れられていた。Tonadilla はスペイン歌劇の作詩を形成するのに役立ち、これが後に Zarzuela (スペイン風軽喜歌劇) の起源となる (J. Subirà)]”。Tonadilla のオーケストラがギターを加えている頃、(一般は tirana と呼んだ) そこでギターの伴奏で歌はれていた民謡は、当時大変な人気を呼んだ：18世紀の末の大歌手兼女優 Tirana と呼ばれた Rosario Fernández もその流行に無関心ではなかった。もう一つの屏がギターに対し開かれ、器楽コンサートにギターが導入されたが、これは主として、シトー修道会の僧で、一般には “Padre Basilio” として知られた僧 Mignel Garcia が第6番目の弦を導入するという技術革新を行ったためである。Padre Basilio は技術の優れたギタリストであり、Carlos IV世及び Maria Luisa の先生であり、又有名な Dionisio Aguado の先生でもあった。

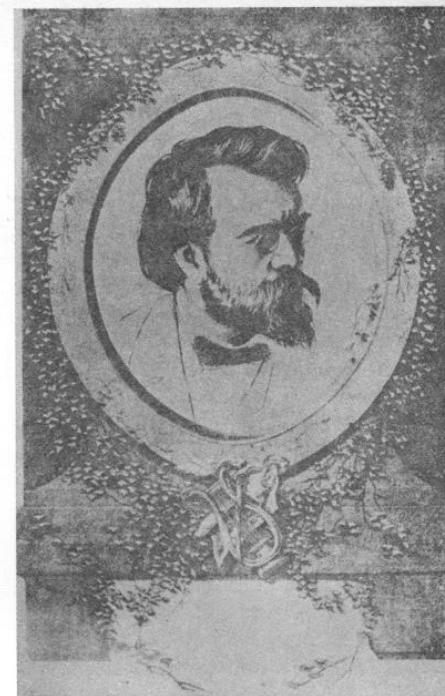
19世紀初頭のギターの巨匠達, Fernando Sors, Dionisio Aguado と Trinidad Huerta は、ギターの芸術的地位を維持し、なおこれを高め、そのためこの頃は王宮に於て又、貴族の館に於て、ピアノ・フルートと真に競う程に貴族階級の愛顧を得るのである。

独立のための戦により、音楽の修養が中断されたため、ギターはスペインの上流社会から消え、フランス人ととの戦の中で国民を統一するものとなる。確かにSors, Aguado, Huertas, Arcas 等の手にするギターはパリを征服し、ヨーロッパの国々、アメリカを遷巻するが、スペインに於ては、民兵や兵士達によって、その行軍やイベリア半島の長い、広い守備前線にともなわれて行く。確かに別の兵士達は Romana 候に従い1807年フランス、ドイツを通ってデンマーク迄赴くのであるが、彼等の幾人かは、負い革にギターをかけて持って行くのである。この軍隊はドイツに於て有名となり、又そのギターも有名となり、その内のかなりがチュートン（ドイツ）人の手に残った。この時点、この場所からドイツに於けるギター製作が始まったのかどうかは知らないが、ドイツに於ては、その品質に於て、スペインよりそれ程後れはとらないし、量に於ては我々を凌駕さえする。

カタランの Tarrega (1854年～1909年) が Sors のたいまつを受け継ぐまでの間、スペインには長い低滯がある。この低滯はある部分では、庶民階級、特にアンダルシアの人々が大いにギターの習練を、この間発展させたことでカバーされた。だから北米の文人 Washington Irving が彼のアルハンブラ物語の中の一つで我々に次のように言うことができたのであろう。“ギターは人の手から手へ渡され陽気な靴屋がオルフォの役をした、彼は巨匠のような巧みさでギターを引いた好青年であった……”

この事は前世纪の中頃アンダルシアに於ては普通のよく普及した習慣であり技巧であって奇怪なことではない。というのも、15, 16, 17世纪に涉って Alonso de Mudarra や Miguel Fuenllana, この人は盲目であったが、を始めとする卓越した vihuela 奏者達を生み出した、いわゆるアンダルシア楽派の一団の楽士を生みだした搖籃の地なればこそである。

Tárregaに戻ると、Francisco Tarrega は全世界に有名になったが彼は一有名な Sainz de la Maza が言ったことだが“技巧の改革者であり、ギターに於けるバガニニであった” [Nicolás Paganini, イタリアの名バイオリニスト、彼に於いて厳格な音楽の巨匠の頂点を見る (1782年～1840年)]。“Tárrega は伝統の全てを集め、現代の決定的なテクニックを創設し純粹芸術の道を示した” 彼の後には、偉大なギタリストで作曲家の Miquel Llobet, それから現代の Andrés Segovia, Emilio Pujol, Daniel Fortea, Regino de Sainz de la Maza, Quintín Esquembre, Pedro Moreno, Narciso Yepes, Renata



フランシスコ・タルレガ

Tarragó, Carlos Santias, Nicolás Alfonso, やその他のすぐれたコンサート奏者又は演奏家が続く、これらのすぐ後に、他の流派、フラメンコ・ギターの輝かしい名声に価する人達の名前をつけ加えるのが正当である。即ち、Ramón Montoya, Paco de Lucena, Amalio Cuenca, Niño Ricardo, Sabicas, Manolo do Badajoz, Mario Escudero, Manolo de Huelva 等々、これ等の者達はスペイン音楽に対する知識と興味、このノープルな楽器に対する高い評価、ギターにより表現される音楽に対する愛好心と共に、イギリス、フランス、イタリア、スウェーデン南北アメリカ、フィリピン、日本、オーストラリア、南アフリカに知れわたっている。ローマ、シェナ、フローレンス、ブッセル、ロンドン、ジュネーブ、ボストン、シカゴ、サン・フランシスコ、ブエノス・アイレス、シドニー（オーストラリア）、ヨハネスブルグ（南アフリカ）の音楽学校には、今日、ギター学科が設けられている事を言えば充分であろう。〔日本に於けるギター愛好熱は驚くべきものがある。Andrés Segovia の最初の訪日以前は知られていなかった、この楽器、ギターを弾く日本人が今日では 300,000 人を算える。彼の日本に於ける演奏会は常なら

む期待を擗き起した。北米の人達も、これに遅れてはいない、彼等はギターのため一年に 1,000 万ドル即ち約 6 億ペセータの金を投じている。

Sainz de la Maza が主宰しているマドリッド音楽院のギター学科は現在 60 人の生徒を持っている。スペインに於ては音楽院に於ける正規の授業の他に、ギターを教えている先生は無数に居る。Aureo Herrero 教授が Mercedes Lazo 記者に言っていることだが“ギターはハーモニーの楽器であり、それを弾くには音階練習ができれば足りるのではなくて、音楽を知ることが必要である。偉大なギタリスト演奏家は深遠な音楽家である。私はギターの仕事をする時音楽を創造しようと心掛けている。そのため私は生徒達に和音の原則の技術の準備を与え、それでもって、自働的に練習曲を弾く段階に移り、それが 3 年目にできるようになる。”

Don Regino Sainz は良いギタリストになるには、何よりもまず、音楽家にならなくてはならぬ、そしてその後に楽器が解るのであると我々に語っている。

1958 年外務省文化総局は Santiago de Compostela に於いて、Compostela 音楽コースを開設し、それから 4 年目の終りに当たるが、実際素晴らしいものとなった。その

学科の中には—1961 年 8 月～9 月に行なわれた第 4 学期では 32 の異なる国々より来た 105 人の外国人学生を含め 170 人の学生が参加した—50 人の学生が籍を置いているギター学科がある。“Compostela 音楽コースは—文化局長の Ruiz Morales 氏の言うところによれば—ギターの先生として第一学期から、スペイン音楽界に於ける卓越した人物、その芸術家としての全生涯をギターを世界に広めるために挙げた：Andrés Segovia を迎えている。彼の名前はこの 50 人の生徒を引きつけたのである”。この第 4 学期は Orense に於いて 9 月末に行なわれた Andrés Segovia 主宰のギターのための第二回国際演奏コンクールに於いてその頂点に達した。その際 Sainz de la Maza の絶妙な演奏により興をそえられた講演が行なわれた。Jose Tomas と Jose Luis Gonzalez の二人のスペイン人ギタリストが第一位 “Andrés Segovia 賞” と第二位 “Margarita Pastor 賞” をそれぞれ受賞し、又他の最終審査迄残った 3 人の者に栄誉のメダルが与えられた。それらの 3 人はイタリア人 Oscar Guiglia、日本人松田二郎、スペイン人 Jose Lazarro であった。

(完) 次の話題を御期待下さい。

### ギターによる初步和声学の実習（中編）

嘉藤俊介

#### 6. 和音連結に関する諸注意……

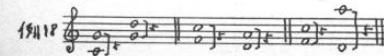
##### A 並行八度は絶対に避ける。（例17参照）

和音を連結する場合に、その相互間の同声部間に 8 度及び 1 度の進行を持つものは、その部分の声部進行が大変強く、他声部との調和を破るので、絶対に避けるべきである。



##### B 並行五度は良くない。（例18参照）

前述の並行 8 度よりは用い方（副 7 の和音及其の他の変化和音相互間の外声部間に起るもの）によって救われる。（例19参照）しかしこれらは例外で、実作品には見ることが出来るが、原則的には並行 8 度と同様、避けるものとする。



##### C 増音程の旋律進行を避ける。（例20参照）

##### D 減音程の進行ならば良い。（例21参照）

以上の注意は全編を通じて守られるべき原則である。從って、學習に當っては、これ等の原則は是非守らねばならない。これらを遵守してこそ、趣味の良い和声連結の感覚を身につけることが出来るのである。



## 第2章 守調的なる各種和音の連結

### 1. I→IV→I, I→V→I の連結

#### 実習に当っての注意

- 共通音を有する和音の連結である。
- 曲首と曲尾はその調のIの和音を用いる。
- 定旋律が4度以上跳躍している場合は同一和音を用いない。
- 先行する弱拍部の和音を次の強拍部に配置することを出来るだけ避ける。
- 導音は原則として重複しない。又、導音が外声部にある場合は常に2度上行するものとせよ。
- 原則として（それが可能な部分には）4声体を用いるが、演奏の便宜上或は独特的な演奏効果等から適当な音の省略は一向に差支えない。

以上の諸注意事項は以後の練習にもそのまま生きる。

作例

練習1.

1. 2. 3. 4.

### 2. IV→V の連結

#### 実習に当っての注意

- この両和音相互間に共通音がない。
- IVの和音は、常にVの和音に先行する。そして、V→IVの連結は特殊な趣味に基づくもの故、これを避ける。
- 低音課題上の旋律は極端な跳躍を避ける。

作例

練習2.

1. 2. 3. 4.

### 3. I<sub>6</sub>→IV, I<sub>6</sub>→V, V→I<sub>6</sub>, V<sub>6</sub>→I の連結

#### 実習に当っての注意

- 6の和音とは、その和音の第3音が低音に置かれた場合を云い、和音の記号の右下に6の字を記して表す、即ち和音の第一転回形のことである。
- 6の和音は根音が第5音を重複する。
- 旋律部乃至は上声部が同位置に停止せる場合には、低音のみが第3音へ上行しの6和音を形成する。
- 6の和音は連続使用してもよい。

作例

練習3.

1. 2. 3. 4. IV<sub>6</sub>→V, IV→V<sub>6</sub> の連結

#### 実習に当っての注意

- IV<sub>6</sub>は根音が第5音を重複する。
- 上3声部は各々2度か3度の音程で動く方が良い。
- IV→V<sub>6</sub>の場合低音に必ず減5度の音程で下行し、増4度の上行は避ける。

作例

練習4.

1. 2. 3. 4. IV<sub>6</sub>→V<sub>6</sub> の連結

#### 実習に当っての注意

- IV<sub>6</sub>は根音を、V<sub>6</sub>は第5音を重複する。
- 上声部に並行5度を起さぬ様、又短音階の場合は低音の増2度進行を避ける。

作例

#### 練習5.

1. 2. 3. 4.

### 6. IV→V→I, I→IV→I の連結（終止法I）

#### 実習に当っての注意

- IV→V→Iの如き和音連結の形を、楽曲の終止と関係なくカデンツと云う。
- カデンツが終止形として楽曲の終止に応用されたものを正格終止と云う。
- I→IV→Iの和音連結が終止に用いられたものを変格終止と云う。
- V→I (IV→Iの場合も同じ) の両方の和音が共に基本形で、Iの最上声部が主音であるものを完全終止、それ以外の全ての条件のものを不完全終止と夫々云う。
- 終止形の最後の主拍が強拍にあるものを男性終止、弱拍にあるものを女性終止と夫々云う。
- 正格終止を簡略化したものにV→Iだけの連結もあるが、実際には下属和音の機能を担うものが先行していない場合でも、VI(後出)の和音やI<sup>6</sup>、又に種々な変化和音等が置かれていることがある。

作例

#### 練習6.

1. 2.

### ギターに関するコンサルタント

ギターについてのすべての御相談に解答して差し上げます。相談することをはっきり書いてギター日本社におよせ下さい。(郵便50円分を封入して下さい。)

3. 4.

### 7. IV→I<sup>6</sup>→V→I の連結（終止法II）

#### 実習に当っての注意

- この終止形はIV→I<sup>6</sup>→V→Iの形で、前出の正格終止のIVとVの間にI<sup>6</sup>を置いて構成される。このため終止感は大変強められる。
- 46の和音とは、ある和音の第5音が低音に置かれ、一般に和音記号の右側に64と上から記して表わす。即ち、和音の第2転回形である。
- 46の和音は原則として第5音を重複する。そして多くの場合強拍に置かれる。

作例

練習7.

1. 2. 3. 4.

これにあと次号に掲載の46の和音の用法及半終止を実験すれば一応主要和声の連結に関する知識と技術を習得したことになる。第1段階は終ったと見て宜しいであろう。

この稿では四声体の和声を主として学ぶのであるが、ギターでは常に4声体の和声を書くことは困難である。時としては二声に、或は六弦全部におよぶ六声の部分も現れることになる。音の省略及増加は必要に応じて積極的に行ってよろしい。

この稿の練習課題の解答は次号に掲載されるが、課題の解答の内幾つかは音の省略及増加されたギター的なものも掲載することにした。

以下次号

*The Mask of the Queen*

6<sup>a</sup>en Re 女王のマスク anonymous 作曲者不明

1610年出版された *Varietie of Lute Lessons* の中の曲である。マスクはイギリスで16世紀—17世紀に行なわれた王侯貴族のための舞台作品で、詩・声楽・器楽・ダンス・演技などを含む仮面劇である。神話・寓話などがその題材となった。

これはその中の一曲で、作曲者は不明である。 左手運指付 永田哲夫（不許転載）

### 添付楽譜解説

永田哲夫

#### 木短調による五曲からなる組曲

作曲者 Gaspar Sanz (?—1710)

編曲 エミリオ・ブホール

本号の「スペインに於けるギターの歴史」に於て紹介された「ガスパー・サンズ」はスペインのアラゴン州カランドの生れで生年月日は不詳である。

サラマンカ大学で神学と哲学を学び学位を得て僧職に入り、後イタリーに渡りナボリで音楽を修業、オルガニスト・ギタリストとして有名になった。

楽譜にも示されている通り17世紀の著名なギタリストで、当時のタブラチュア（記譜方法の一形）よりエミリオ・ブホールにより現代記譜形式に編曲された。

彼はスペインに帰國後フィリップ4世に仕え独自の境地をギターに見出した。

1690年サラゴサで教本を出版、1710年マドリッドで世を去った。

ここに添付された楽譜は当時の音楽の作曲形式を知る上に重要なである。

内容は舞曲を組曲形式に編むことが当时一つの流行のように考えられ、組曲の基本形でもあった。

この曲は終始木短調が基調となっている。曲は五章に組まれ、

1. 前奏曲（活気をもって早く）曲は $\frac{4}{4}$ 拍子、中間の $\frac{6}{8}$ 拍子の所は、前の $\frac{4}{4}$ 拍子の1拍を3連音の感覚で、1, 2, 3拍に置き換えたと考え演奏すれば良い。再び $\frac{4}{4}$ にもどる。原曲では小節が特別示されていないので編者により便宜的に……を付し小節を明確にしたと思われる。

2. アルマンドは元来ドイツ舞曲で、 $\frac{4}{4}$ のテンポで、莊重に奏されるよう示されている。

3. クーラント 3拍子の舞曲でイタリー風に活気に満ちて演奏する。

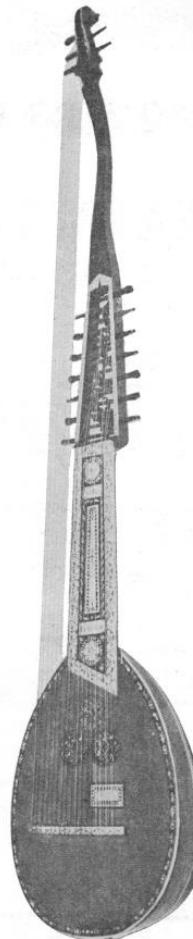
4. サラバンド フランス風にゆったりした演奏を望むと示されている。サラバンドは元来アラビアが起源の由で、16世紀の初頭スペインで盛んになった3拍子の重量感のある舞曲である。

5. 現代式に言えば三連音による明朗で快活な演奏を望む曲である。当時の作曲形式から言えばジーグ（Gigue）によって終るのが普通であるが、ここではジーグと明記されていないが、ジーグと同じように快活に演奏されるを望むが如くである。

ジーグは元来3拍子系の快速舞曲であるから、三連音を1拍子と考えれば、三連音が三個で3拍子となり、終始そのテンポをまわり続け、ホ長調の明るい和音で曲を終っている。

本曲中の2及5が1967年パリで行はれる国際ギターコンクール（別欄掲載の如く）の課題曲に含まれているが、ここでは全曲を添付し御愛奏を望む次第である。

1, 3, 4は中級程度の技術で弾くことが出来ると思う。



マルチン・ショット作 チタローネ  
表紙裏解説を参照して下さい。

97C 1048

# CINQ AIRS DE COUR EN MI MINEUR

Transcription de  
EMILIO PUJOL

Gaspar SANZ

## I. CAPRICO ARPEADO POR LA CRUZ (CAPRICE ARPEGIE SUR LA CROIX)\* (PRELUDE)

*Animé*

## II. LA PRECIOSA (ALLEMANDE)



### III. CORRIENTE (COURANTE)

*Animé*

IV. ZARABANDA FRANCESA  
(SARABANDE FRANCAISE)

*Lentement*

B V                    B II

B II                    B IV

B III                    B II

V. SESQUIÁLTERA

*Vif et gai*

B II

B IV

B II

B III

B VII

B II